

魯迅『野草』におけるタゴール、徐志摩の影響について

秋吉, 收
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授 : 中国近代文学

<https://hdl.handle.net/2324/17027>

出版情報 : 中国文学評論. (35), pp.1-14, 2009-12-31. 中国文学評論社
バージョン :
権利関係 :

魯迅『野草』における タゴール、徐志摩の影響について

秋吉 収
Shu AKIYOSHI

序

北京『晨报副刊』と魯迅と言えば、1921年から22年にかけて、「阿Q正伝」を連載した¹ことが真っ先に思い出される。だが、魯迅が散文詩集『野草』を執筆する過程で参照したと見られる重要な素材の一つとして、筆者は以前の小論²にて、北京『晨报副刊』の存在を指摘したことがある。

今回の小論では、アジア最初のノーベル（文学）賞作家タゴールと、魯迅の論敵としても名高い徐志摩の、北京『晨报副刊』に掲載された作品に注目しながら、散文詩集『野草』の中でも、魯迅の内面世界を綴った特に難解と評される重要な作品「影的告别」について考察したい。「影的告别」は、次のような作品である。

影的告别³

人睡到不知道時候的時候，就會有影來告別，說出那些話——

有我所不樂意的在天堂裏，我不願去；有我所不樂意的在地獄裏，我不願去；有我所不樂意的在你們將來的黃金世界裏，我不願去。

然而你就是我所不樂意的，朋友，我不想跟隨你了，我不願住⁴。

我不願意！

嗚呼嗚呼，我不願意，我不如徬徨於無地。

我不過一個影，要別你而沉沒在黑暗裏了。然而黑暗又會吞併我，然而光明又會使我消失。

然而我不願意徬徨於明暗之間，我不如在黑暗裏沉沒。

然而我終於徬徨於明暗之間，我不知道是黃昏還是黎明。我姑且舉灰黑的手裝作喝乾一卮酒，我將在不知時候的時候獨自遠行。

嗚呼嗚呼，倘若黃昏，黑夜自然會來沉沒我，否則我要被白天消失，如果現是黎明。

朋友，時候近了。

我將向黑暗裏徬徨於無地。

你還想我的贈品。我能獻你甚麼呢？無已，則仍是黑暗和虛空而已。但是，我願意只是黑暗，或者會消失於你的白天；我願意只是虛空，絕不佔你的心地。

我願意這樣，朋友——

我獨自遠行，不但沒有你，並且再沒有別的影在黑暗裏。只有我被黑暗沉沒，那世界全屬於我自己。

一九二四年九月二十四日。

一

魯迅の「青年必讀書」（1925年）に、次のような記述が見えている。

我看中国书时，总觉得就沉静下去，与实人生离开；读外国书——但除了印度——时，往往就与人生接触，想做点事。⁵

（下線太字等は引用者による。以下同じ。）

中国でなく外国の書物を多く読むようにと述べた魯迅の有名な文章である。ここに、いかにも不自然かつ嫌みたっぷりに挿入された、“除了印度（インドを除く）”の一言。他にもない、1924年に中国を訪れた、アジア初のノーベル賞作家、タゴールを揶揄しての言であった。魯迅は生涯、タゴール、そしてその取り巻きたる徐志摩⁶らの新月派に対して口を極めての悪罵を浴びせている⁷。晩年に近い魯迅の文章「罵殺與捧殺」（1934）から、

人近而事古的，我记起了泰戈尔。他到中国来了，开坛讲演，人给他摆出一张琴，烧上一炉香，左有林长民⁸，右有徐志摩，各各头戴印度帽。徐诗人开始介绍了：“俺！叭哩咕噜，白云清风，银磬……当！”说得他好像活神仙一样，于是我们的地上的青年们失望，离开了。神仙和凡人，怎能不离开呢？⁹

魯迅はなぜ、タゴールを、そして徐志摩を始めとする新月派のメンバーを目の敵にして罵倒し続けたのであろうか。そこには、“欧米”と“日本”という一つの分岐が存在している。日本留学生の魯迅や周作人らに対して、新月派の徐志摩や胡適、聞一多らはいずれも欧米留学生であった。安近短の日本留学を選択した魯迅たちに比べて、欧米留学生たちはほとんどが有産階級の出身であり、その文学も彼らの出自を反映してお洒落でスマートなものであった。政治的主張が異なるのも自然の成り行きであったと言えよう。

インドの富豪の家系に生まれたタゴールもまたイギリスへの長い留学経験を持つ。詩集『ギーターンジャリ』によって獲得した、1913年度ノーベル文学賞の授賞理由に次のようにある。

“because of his profoundly sensitive, fresh and beautiful verse by which, with consummate skill, he has made his poetic thought, expressed in his own English words, a part of the literature of the West”¹⁰

授賞理由のこの言葉は、アジア人でありながら、タゴールもまた如何に西洋文学に親しみ、取り込んでいたかを端的に伝えている。英語で綴られ、“西方文学の一部分”と賞賛されたタゴールの作品に対して、少なくとも表面的に、魯迅の方から歩み寄ることは一切なかった。

*

タゴールが初めて中国にやってきたのは、1924年のことである。4月12日に上海から入り、南京を経て北京に約一ヶ月滞在、香港を経て5月30日には次の訪問地日本へと旅立った。その間、ずっと徐志摩が通訳として随行（日本へも同行）した。中国の文芸界はこの東洋の偉人タゴール来華を大々的に歓迎する¹¹。1921年に結成された文学研究会も、機関誌『小説月報』（当時、鄭振鐸主編）14巻9号（1923年9月）と10号（同年10月）に、連続2号にわたる特集「太戈爾號」を組んでいる¹²し、その他の多くの新聞雑誌でもタゴール関係記事、作品翻訳が誌面を賑わせている。

小論が注目する『晨报副刊』紙上にも、タゴール関係記事が数多く掲載されている¹³。管見の限り、最初に登場したのは、1921年2月27・28日、瞿世英・鄭振鐸「太戈爾研究」。これは、二人の往復書簡の形でタゴールの思想、文学等について論じたものである。冒頭に、文学研究会におけるタゴール討論会の開催を歓迎する言葉が見え、この文章が、成立（1921年1月）直後の文学研究会の活動の一環であることが窺える。タゴール文学の中国への翻訳、紹介についての議論も見えている。¹⁴

同年3月16日には、初めてのタゴール作品の翻訳が掲載される。甄甫「譯太阿爾詩兩首『園丁集』第三 第五十八」である。これ以後、タゴールの作品が紙面を賑わせていくことになる。

小論が対象とする魯迅の「影的告別」が執筆されたのは、1924年9月24日。タゴールは5月末に中国を去っているから、その間わずかに4ヶ月足らず。タゴール訪中前後は、文壇全体がタゴール熱に浮かされておられ、この作品は、まさにタゴール来華の余韻さめやらぬさなかに書かれたものとも言えるだろう。そして興味深いことに、「影的告別」と中国に翻訳紹介されたタゴールの詩篇は、幾つかの点でその要素を共有しているのである。

以下、両者を具体的に比較しながら検討してみたい。

最初に引用するのは、1921年5月31日掲載、「別離」（印度太戈爾作 萬勞奴譯）である。

親愛的母親，讓我去，……哦！讓我去！

（中略）

夜晚是深了黑了——

你驚醒了你又憂愁，

（中略）

假設你的眼睫永遠止睜開這模點兒——

我就出現像在夢中那樣，

我親愛你，等你睡得正酣的時候；

那麼，你忽然驚醒了，

覺得我也在床上——

但是我消滅了，沒有一個人知道我在那裡。

魯迅「影的告別」も、影がやってきて別れを告げるという、別れをモチーフとした作品であったが、この詩における「別離」は母との別れであり、影とは関係がない。だが、

作品全体を彩る夜の暗黒、そして夢の中に出現する主人公は、「人睡到不知道時候的時候，就會有影來告別」

の影の形象と相重なる。この詩「別離」の主人公も結末で“消滅”してしまっているが、「影的告別」の影も、結末では暗黒に沈められて消えてしまっている。「只有我被黑暗沉沒，那世界全屬於我自己。」興味深いのは、どちらも悲しく消えていくにもかかわらず、そこに不思議な安寧と満足を得ていることである。

紙幅の関係から多くを引くことはできないが、翻訳紹介されるタゴールの作品には、“夜”“暗黒”そして“別れ”を詠み込んだものが極めて多いことは注目される。

次に引くのは、魯迅「影的告別」が執筆される一年前、1923年8月21日に、『晨報附刊・文学旬刊』上に掲載された、王統照による「太戈兒詩雜譯 自園丁集」である。

我的朋友！ 你自己不要保守着你心中的秘密。

對我說牠呵，僅對我呵，在秘密之中。

你微笑得如此溫柔，軟嫩的耳裡，我的心要聽見了，不止我的耳呵。

夜是黑的，房子是沉默的，鳥兒們的巢爲睡眠所掩護了。

由猶豫的淚痕中，由戰慄的微笑中，由甜密的含羞與痛苦中，向我說出你心中的秘密。

就愛呵！ 從你的甜密的束縛中解放我吧！ 這些親吻的葡萄酒更不多了。

這種陰沉香氣的氳氳窒悶了我的心了。

將門開放，教房中得點晨光吧。

在你之中我是遺失了，包裹在你的寵愛的懷抱以內。

從你的符咒中解放我，並且將勇敢給予我，將我的已解放的心貢獻與你。

○ ○ ○

哦，世界呵！ 我採折了你的花朵

我將花朵抱在我心裡而荊針刺我。

當白晝既沈而昏黑，我看見花已萎落，但將痛苦遺却。

哦，世界呵！ 許多花朵帶了芬香與驕美向你來了。

不過我的光陰却爲花的集合而度過，而經過黑夜，我沒了我的玫瑰，只有痛苦留却。

この詩にも“影”は登場しないが、誰かに向けて一心に語りかける形式は、「影的告別」と共通する。しかも、その相手への呼びかけはいずれも「朋友」である。

両詩には幾つかの興味深い相似が認められる。まず、タゴールのこの詩でも、“夜（と昼）”そして“(暗)黒”が一つのモチーフとなっている。「夜是黑的」「當白晝既沈而昏黑」「得點晨光」「經過黑夜」との言葉からは、作者の光と影のあわいへの強い執着さえ窺われる。細かい表現に目を注げば、タゴール詩の「我的朋友！・・・對我說牠呵，僅對我呵，在秘密之中」「向我說出你心中的秘密。」は、「影的告別」の「・・・影來告別，說出那些話」に対応する。影が私に語りかけるのは、秘密とは言わないが、極めて深い内心吐露の告白であった。また、それに続く「從你的甜密的束縛中解放我吧！」、束縛の中から私を解放してくれというのは、人から決して逃れられない存在たる影の怨嗟の声のようでもある。「影的告別」の影は今まさに人から離れていこうとしているのだ。続いて、「這些親吻的葡萄酒更不多了」と「酒」が登場しているが、「影的告別」にも「我姑且舉灰黑的手裝作喝乾一卮酒」と、文脈は全く異なるが、同じく「酒」が見える。また、「將我的已解放的心貢獻與你」。この“贈る”という行為は、「影的告別」にも出現する。

「你還想我的贈品。我能獻你甚麼呢？無已，則仍是黑暗和虛空而已。」タゴール詩では、その贈り物は“すでに解放された心”であったが、魯迅の方は、“暗黒と虚空のみ”。底の見えない闇である。タゴール詩の最後の一聯には、「世界」という言葉が二回使われているが、魯迅「影的告別」が「那世界全屬於我自己。」で締め括られることは見た通り。

次に、魯迅の「影的告別」執筆と同じ1924年の『晨報副刊』掲載作品から、タゴールの作品を抜粋する。1月5日『晨報副鐫』¹⁵、歐陽蘭訳「歧路選譯（五十）」である。

在路上我是同着群衆的，
到了路終，我却覺得我是單獨地同了你。
我不知道什麼時候白晝轉入了黃昏，同伴離開了我。
我不知道什麼時候你的門兒開，我站着猝擊我自己的心的音樂。
但是，點點的淚痕，仍然在我的眼中嗎，雖然床舖鋪好了，燈兒點亮了，你和我呵，
雖然是孤獨的？

やはり抽象的な作品で、「我」「你」が誰であるかも知らされることはないが、下線部分に見える、“単独で君と一つになり”“昼から黄昏に入ると、相棒は私から離れてしまう。”そうした存在はまさに“影”を彷彿とさせる。

また、「影的告別」執筆（9月24日）の約2ヶ月前、7月11日に同じく『晨報副鐫』に掲載された雪紋訳の「太戈爾詩二首」の「一」から、

白晝站在你我之間作伊最後的別禮。黑夜用網兒遮著臉，隱藏了我房裡點着的一盞明燈。

你的黑暗的奴僕默默地走進來，還為你展開了這結婚的氈子，使你孤獨地，在這無言的沉寂裡，和我坐着，一直到夜間。

——採果集 第四十四首——

結婚の前夜、花嫁の描写であろうか、だがその場面はやはり昼と夜の境、暗黒と光明の間をもって描かれる。“你的黑暗的奴僕”はそっと歩み入り、君を孤独にしなが、黙って夜までそばにいるのだ。

タゴールの詩を彩る暗黒の形象は、無論、中国とは異なるものである。肉親や愛する者たちと次々に離別、死別するというタゴール自身の経験。そして夫人殉葬のサティに象徴されるような、伝統的な習慣、風習などインド社会自体の問題、さらには1947年まで2世紀にも及んだ、イギリス植民地として蹂躪される国家全体の暗黒、閉塞感がタゴールの文学全体を貫いている¹⁶。だがそれは、抜き難い封建道徳と抗い、アヘン戦争以来、欧米列強さらには日本から侵略される当時の中国の現実そのまま重なるものであった。翻訳に携わった鄭振鐸や王統照、そして徐志摩や魯迅ら中国の文人たちは、そこに強く共感したのであった。

魯迅がタゴールの詩篇に注目したと考えられる要素については、そのイメージ、内容ばかりでなく、その詩形にも注意を払う必要がある。それはすなわち、“散文詩型”である。

タゴールの詩はもともとベンガル語で書かれ、それを自身で英語に翻訳する過程で散文詩型を採用した。当時、中国に翻訳紹介されたものはその英語訳からの重訳である。¹⁷

新文学運動の中、旧来の文語定型詩に対抗して、口語自由詩の創作が叫ばれていたが、その急先鋒として特に注目されていたのが、散文詩である。散文でありながら詩というこの文型に対し、旧詩派からの攻撃も凄まじいものがあったが、幾度かの論争を経て、文壇でも次第に市民権を得るに至る。

魯迅もまた散文詩に注目、重視していた一人であった。1919年という極めて早い段階の散文詩習作、「自言自語」¹⁸の存在がそのことを物語るが、彼の最初の詩集たる『野草』が、まさにこの散文詩型を採用していることが、それを確かに裏付ける。彼は『野草』について、「『自選集』自序」¹⁹（1932年）で次のように述べている。

有了小感触，就写些短文，夸大点说，就是散文诗，以后印成一本，谓之《野草》。

この言葉からは、魯迅が『野草』に散文詩型を採用したことへの自負の念が読み取れる。彼は革新的な新体詩、散文詩に強く注目していたのである。タゴール来華の前後、つまり魯迅が散文詩集『野草』の筆を執る直前に、極めて多くのタゴール詩篇が翻訳されていたが、そのほとんどはまさにその散文詩であった。魯迅がタゴールの作品に対して熱い眼差しを注いでいた可能性は否定できないだろう。

だが冒頭に見たような、タゴールに対する魯迅の徹底した非難と排斥の言葉に接する時、不可思議の念にとらわれざるを得ない。

二

さてここで、タゴールから目を転じて、タゴール来華の際の通訳を務め、タゴール同様、やはり一貫して魯迅の謾罵を浴び続けた、詩人徐志摩に着目する。これまで見てきたタゴール詩の掲載と時を同じくして、同じ『晨报副刊』に、徐志摩の「夜」という作品が掲載されたのは、1923年12月1日のことであった。

夜，無所不包的夜，我頌美你！

（中略）

夜呀，你在那裏？

光明，你又在那裡？

我不在這裡，我不在那裏，但只隨便那裡都有我。

『不要怕，前面有我。』一個聲音說。

『你是誰呀？』

『不必問，跟着我來不會錯的。我是宇宙的樞紐，我是光明的泉源，我是神聖的衝動，我是生命的生命，我是詩魂的向導；不要多心，跟我來不會錯的。』

（中略）

我不在這裡，我不在那裏，但只隨便那裡都有我。若然萬象都是空的幻的，我是終古不變的真理與實在；

（中略）

你要真幸福，須向真痛裡嘗去；

你要真實在，須向真空虛裏悟去；

你要真生命，須向最危險的方向訪去；
你要真天堂，須向地獄裏守去
這方向就是我。

這是我的話，我的教訓，我的啓方；

我現在已經領你回到你好奇的出發處，引起你遊興的夜裡；

你看這不是湛露的綠草，這不是溫馴的康河？願你再不要多疑，聽我的話，不會錯的——我永遠在你的周圍。

志摩

一九二二年七月康橋

志摩這首長詩，確是另創出一種新的格局與藝術，請讀者注意！

徐志摩は1918年に渡米、最初は歴史学、経済学などを学ぶが、1920年に渡英して本格的な文学創作へと移行する。1922年10月の帰国3ヶ月前に在学中のケンブリッジ大学で書かれたこの詩は、中国で五四退潮期の暗黒の中で掙扎（もが）していた魯迅たちとは遠くその背景を異にする。だが、魯迅の「影的告別」と比較してみたとき、両者は極めて興味深い相似をなす。

まずタイトルは、志摩の“夜”に対して、魯迅は“影”といずれも暗黒の象徴である。また、仔細に比較してみると、部分部分の内容、表現はきわどく重なり合う。

志摩「夜」から、

『不要怕，前面有我。』一個聲音說。

『你是誰呀？』

『不必問，跟着我來不會錯的。．．．

魯迅「影的告別」から、

人睡到不知道時候的時候，就會有影來告別，說出那些話——

．．．．．

朋友，我不想跟隨你了，

“夜”は、“影”と同じように私に語りかける。擬人化された両者は、興味深いことに私に対して正反対の態度を示す。志摩の“夜”は私と一緒にいるよう慫慂するが、魯迅の“影”は、私から離れることを宣言するのだ。だが、別れを告げる“影”も、実際には夜と同様、私から決して離れることは（でき）ない存在である。

志摩「夜」から、

夜呀，你在那裏？

光明，你又在那裡？

我不在這裡，我不在那裏，但只隨便那裡都有我。

魯迅「影的告別」の結末部分から、

我不過一個影，．．． 黑暗又會吞併我，然而光明又會使我消失。．．．

我終於徬徨於明暗之間，我不知道是黃昏還是黎明。
．．．只有我被黑暗沉沒，那世界全屬於我自己。

暗黒と光明のあいまいに、消えゆく存在。だがいずれも、消えることすなわち、すべてを所有したのに等しいことを誇示する。「夜」の結末の一句でも、“夜”は私に、“我永遠在你的周圍。”と語りかけていたが、私自身、引用文の冒頭で、“夜，無所不包的夜，我頌美你！”と、すべてを包み込む夜に対して讃辞を贈っていたのだ。

次に、形式の相似に注目したい。志摩の“夜”は、私に進むべき方向を語り聞かせる。

你要真幸福，須向真痛裡嘗去；
你要真實在，須向真空虛裏悟去；
你要真生命，須向最危險的方向訪去；
你要真天堂，須向地獄裏守去

魯迅の“影”は、彼自身の進むべき方向を自問自答する。

有所不樂意的在天堂裏，我不願去；
有所不樂意的在地獄裏，我不願去；
有所不樂意的在你們將來的黃金世界裏，我不願去。

ここでは、いずれも進むべき方向について、まず前提条件を提示して、それに対する答えを表明する、という同じ構成になっていることや、短い中に“天堂”と“地獄”という同一語を含むことなど、内容上の対応をも考え合わせるとき、興味深い相似である。

志摩の詩「夜」の末尾に付された「志摩這首長詩，確是另創出一種新的格局與藝術，請讀者注意！」の言葉は、当時『晨報副刊』の編集者を務めていた、文学研究会会員の王統照による²⁰ものだが、この詩に注目した人間が、魯迅ばかりではなかったことが窺われる。²¹

だが、志摩の“夜”のあつけらんとした“明るさ”に対して、魯迅の“影”はどこまでも暗く、しかも極めてひねくれている。二人の詩がそのまま両者の性格を表出するなど断じては、(魯迅に)怒られそうだが、欧米留学中の将来への希望に溢れていた徐志摩と、暗黒の中国で掙扎していた魯迅の状況が反映していることは言うまでもない。その距離は、実際の関係の上でも、文学の上でも表向きには終生縮まることはなかった。

徐志摩の「夜」に関連して、もう一点だけ指摘しておきたい。同日(1923年12月1日)の『晨報副刊』、つまり同じ紙面に、ボードレールの散文詩が掲載されている。題と書き出しの部分だけを引用する。

法國波特萊爾著「月亮的恩惠 散文詩」 焦菊隱譯

當你睡在搖籃裏，這隱而又現的月亮從窗上往裡望着，．．．

魯迅の散文詩「影的告別」と接近すると言うほどのものではないが、あえて挙げるならば、夜の象徴たる“月”を詠んだ詩であること、書き出しが、「影的告別」同様、夜、主人公が夢境にあることが共通している。だが、ここで注目したいのは、徐志摩の「夜」

と同紙の同頁に“ボードレールの散文詩”が掲載されていること自体である。フランスの悪魔派詩人ボードレールの作品は、早くから近代中国文壇に紹介され、散文詩家としての名声もすでに極めて高かった。早い時期から散文詩に注目し、自身、散文詩連作を発表するほどだった魯迅は、わざわざ「散文詩」だと注記されたこのボードレールの詩に目を留めていた可能性は高い。そして、その同じ頁には徐志摩のやはり散文詩「夜」が掲載されていた。それは魯迅が「影的告别」を執筆する数ヶ月前のことであった。

小論が注目する『晨报副刊』と徐志摩の両方に、魯迅が直接言及した興味深い文章がある。1926年6月10日『莽原』掲載、「再来一次」から。

・・・这还是九二三年九月所作，登在《晨报副刊》上的。那时的《晨报副刊》，编辑尚不是陪过泰戈尔先生的“诗哲”，也还未负有逼死别人，掐死自己的使命，所以间或也登一点我似的俗人的文章²²

徐志摩は、魯迅の学生でもある孫伏園が1921年から24年末まで務めた『晨报副刊』の編集職を去った後、1925年の10月に『晨报副刊』の編集長に就任している。孫伏園編集の下では、「阿Q正伝」が連載されるなど、魯迅と『晨报副刊』の関係は極めて良好なものであったが、徐志摩編集の下ではそういうわけにはいかなかった。ターゲットを引き合いに出しながら、「詩哲」徐志摩を揶揄することからもそのことは明らかである。

徐志摩は、1931年に不慮の飛行機事故によって34歳という若さでこの世を去るが、魯迅は彼の没後ですら、その批判の手をゆるめることはなかった。「『集外集』序」より。

・・・待到称为诗人的一出现，就洗手不作了。我更不喜欢徐志摩那样的诗，而他偏爱到各处投稿，《语丝》一出版，他也就来了，有人赞成他，登了出来，我就做了一篇杂感，和他开一通玩笑，使他不能来，他也果然不来了。这是我和后来的“新月派”积仇的第一步；²³

ここでは、はっきりと徐志摩の詩を否定している。辛辣な揶揄は、徐志摩の死後も一向に衰えることはない。魯迅の執念を感じさせる文章である。だが、徐志摩は魯迅より十五歳も年下である。文壇の大御所たる魯迅が、そんな“ひよっこ”にこうまでヒステリックに刃を向ける必要があったのか。一顧だにしない、歯牙にもかけないことは、徐志摩への侮蔑、嫌悪の至高の表現であった。魯迅が徐志摩の文学を具体的に批評した文章はほとんど見当たらない。しかし、魯迅ほどの理論家であれば、こんな感情的な攻撃ではなく、完膚無きまで理論的に打ち負かすことができたのではないか。それをしなかったのはなぜか。おそらく魯迅にはそれができなかった。魯迅は徐志摩の詩が嫌いだった、認めたくはなかった。だが、そこに自分とは異なる、認めざるを得ない確かな“詩”が成立していることを強く認識していた。つまり、徐志摩の文学に、魯迅を本気にさせる何らかの要素が存在したのではないか。そして、おそらくそれは、“詩人”の天性であった。徐志摩の詩「夜」に、次のような一節があった。

『不必問，跟着我來不會錯的。我是宇宙的樞紐，我是光明的泉源，我是神聖的衝動，我是生命的生命，我是詩魂的向導；不要多心，跟我來不會錯的。』

魯迅になかった（と自身が強く認識していた）もの、それがこの“詩魂”であった。

徐志摩が天真爛漫に書き付けた“詩魂的向導”、この言葉は、魯迅の心に強く響いたに違いない。徐志摩を表面的には徹底して排除しながら、否定すればするほどに却って、相手を意識してやまなかった魯迅の哀しさが透けて見える気がする。

徐志摩の詩「夜」にも、魯迅との共鳴を聴くことができたように思うが、魯迅と徐志摩は実際にはお互い暗に共感するところがあったのではないだろうか。魯迅が「影的告别」を執筆（1924年9月24日）する直前、1924年6月21日のやはり『晨报副鐫』に、「北戴河海濱の幻想」²⁴と題する、徐志摩の散文（詩）が掲載されている。

幻想消滅是人生裏命定的悲劇；青年的幻滅，更是悲劇中的悲劇，夜一般的沈黑，死一般的凶惡。

（中略）

過去の實在，漸漸的膨脹，漸漸的模糊，漸漸的不可辨認；現在的實在，漸漸的收縮，逼成了意識的一線，細極狹極的一綫，又裂了無數不相聯續的黑點……黑點亦漸漸的隱翳，幻術似的滅了，滅了，一個可怕的黑暗的空虛……

ここに吐露された徐志摩の“黑暗”への深い思索は、魯迅にも通底するものが感じられる。現実に対する絶望、幻滅の念は、当時の魯迅自身が一貫して表示していたものであり、散文詩集『野草』はその思いを詩芸術に託した結晶であった。また、過去に抱いていた期待や信念が次第に模糊としたものとなり、現在はさらに収縮していき、線から黒点に、そしてそれも消えてしまい暗黒の空虚だけが残った。若き徐志摩の絶望は、当時の魯迅の境地にそのまま通ずると同時に、十五歳年上の魯迅が、やはり青年時代に感じた絶望をも彷彿させる。

日本留学時代、魯迅は文学による啓蒙運動に身を投じることを決意し、仲間とともに雑誌『新生』発行を計画したが、いざ出版するとなった時、経費の負担などの問題から仲間は一人居り二人去り、結局発行は実現しなかった。

魯迅は『『呐喊』自序』（1923年）²⁵の中で、当時の状況を次のように回想している。

《新生》の初版之期接近了，但最先就隐去了若干担当文字的人，接着又逃走了资本，结果只剩下不名一钱的三个人。……凡有一人的主张，得了赞和，是促其前近的，得了反对，是促其奋斗的，独有叫喊于生人中，而生人并无反应，既非赞同，也无反对，如置身毫无边际的荒原，无可措手的了，这是怎样的悲哀呵，我于是以我所感到者为寂寞。

这寂寞又一天一天的长大起来，如大毒蛇，缠住了我的灵魂了。

希望に燃えて留学から帰国した徐志摩が、現実の中で味わわねばならなかった挫折は、まさに魯迅自身の過去と重なって見えたことだろう。後進への思い遣りと援助にかけては人後に落ちなかった魯迅のこと、徐志摩の気持ちに全く同情しなかったとは思えない。だが、裕福な家庭に育ち、欧米留学生として恵まれた環境を享受し、新月派という魯迅の対立陣営の急先鋒だった徐志摩に対し、魯迅が優しい言葉をかけることはあり得なかった。極めて激しい攻撃に終始したこと、見てきた通りである。

*

魯迅の「影的告别」や徐志摩の「夜」に通ずる“暗黒”のモチーフに注目する時、忘れてならないのは、タゴール（詩）の存在である。執筆に直接の影響を与えたかを即断することはできないが、タゴールの詩篇が彼らの意識下に存在していたことは否定できないだろう。タゴールの文学に注目し、もしもそこから影響を受けていたとしても、魯迅がそれを素直に語ることは、残念ながらあり得なかった。しかしタゴールに傾倒していた徐志摩は、タゴールの詩が中国文壇に与えた影響について次のような興味深い言葉を残している。1923年9月『小説月報』「太戈爾號（上）」掲載、「太戈爾來華」²⁶から、

太戈爾在中國，不僅已得普遍的知名，竟是受普遍的景仰。（中略） 在新詩界中，除了幾位最有名神形畢肖的太戈爾的私淑弟子以外，十首作品裏至少有八九首是受他直接或間接的影響的。這是很可驚的狀況，一個外國的詩人，能有這樣普及的引力。

“十首のうち八、九首はタゴール詩の影響を受けている”というのは誇張に過ぎようが、徐志摩自身、そして、表面的にはタゴールを否定し続けた魯迅もまた、タゴールの散文詩から某かを感じていたのかもしれない。²⁷

“志摩這首長詩，確是另創出一種新的格局與藝術，請讀者注意！”と王統照が書き付けたように、徐志摩の「夜」は当時の文壇に新風を送り込み、その半年後に書かれた魯迅の「影的告别」も、魯迅文学芸術の粹として現在に至るまで読み継がれることとなった。

タゴールと徐志摩、そして魯迅。文学史の上では、敵対関係の最たるものとして、その文学上の交流などについてはほとんど顧みられることはなかった。だが、極めて複雑な様相を呈しながらも両者の間には一定の反応関係が伏在していたと考えている。

タゴールとは、東洋と西洋が文学の上で初めて交差した一つの象徴であった。徐志摩のような欧米留学生と、魯迅のような日本留学生、近代文学創出の過程で、それぞれが果たした役割の違いをたどることも興味深い研究課題であろう。

その上で、北京『晨报副刊』の存在を忘れることはできない。小論にて引用したタゴールのそして徐志摩の詩はすべて『晨报副刊』に掲載されたものであった。魯迅の散文詩集『野草』の成立において、この文芸誌はやはり重要な役割を果たしていたと考えられるのである。

やはり魯迅「影的告别」執筆前、タゴール来訪当日の日付、1924年4月12日発行の『晨报副刊』に掲載された、楊晶華「杜鵑的悲哀」という単文から引用する。

・・・貓頭鷹 又興奮地說：「鵑哥！ 消極之途，終是黑暗的牢獄。請你千萬不要因桃花妹妹的萎謝，便甘自投黑暗啊！ 我們都是□着希望之花呢！ 應該努力上積極之途，從黑暗裡去找光明，現在的世界雖然黑暗，我的眼却是特別光明。前進吧，幸福之園在前啊！」以是杜鵑告別了黃鶯，跟着貓頭鷹飛向荷塘深處去了。

（□は、原文不鮮明。：引用者）

鳥たちの口を通して、“黒暗”の垂れ込める当時の暗い社会状況が語られている。

インド社会の暗黒を陰に陽に告発したタゴールの文学が当時の中国に受け入れられた意味は、無論、彼が東洋で最初にノーベル賞を受賞したことだけではなかった。魯迅や徐志摩は言うに及ばず、見よう見まねでタゴールの詩をなぞった駆け出しの作家たちも

含めて、文壇のすべての者たちが、何とかして中国の暗黒を克服したいと切に願っていたからに他ならない。そんなタゴールへの期待が、タゴール到着歓迎臨時増刊を組んだ、1924年4月10日発行の『小説月報』第15巻第4号、(記者)「歓迎太戈爾先生」に書き付けられている。

他勇敢的發揚東方的文明，東方的精神，以反抗四方的物質的、現實的、商賈的文明與精神；他預言一個靜默的美麗的夜天，將覆蓋於現在擾亂的世界的白晝，他預言國家的自私的心將死去，而東方的文明將於忍耐的黑暗中，顯出它的清晨，乳白而且靜寂。

注

-
- 1 魯迅「阿Q正伝」：『晨報副刊』1921年12月4日から1922年2月12日まで連載。
 - 2 「魯迅の『野草』執筆と北京『晨報副刊』」 1993年12月、九州大学中国文学会『中国文学論集』第22号、67～84頁。
 - 3 1924年12月『語絲』週刊第4期。
 - 4 “住” 初出誌『語絲』は、“往”につくる。ここでは、後の単行本等により“住”に改めた。この異同に関わる問題について、詳細は拙稿「『野草・影的告別』考—“行く”か“留まる”か」（2007年3月、九州大学言語文化研究院『言語文化論究』第22号、1～11頁）参照。
 - 5 魯迅「青年必讀書一應『京報副刊』的徵求」：1925年2月21日『京報副刊』原載。『魯迅全集 第3巻』『華蓋集』（2005年、人民文学出版社刊）所収、13頁。
 - 6 参考：「徐志摩略歴」
1897年1月15日、浙江省海寧の富裕な商人の家に生まれる。
1915年、杭州一中を卒業後、上海の滬江、天津の北洋、北京大学の三大学で法律を学ぶ。
1918年、アメリカ留学。クларク大学、コロンビア大学で政治学を修める。
1920年、渡英。ロンドン大学で政治経済学を学ぶが、のちにケンブリッジ大学に移り、文学（詩作）に転ずる。
1922年10月、帰国。北京、清華、平民大学で英文学を教えながら、新詩を次々に発表。
1923年、胡適らと北京で新月社を興す。社名はタゴールの詩集『新月集』によると言う。
1924年、タゴール来華の通訳をつとめる。
1925年10月、『晨報副刊』主編。この年、第一詩集『志摩的詩』出版。
1928年、日本、アメリカ、欧州、インドなどを歴遊。
1931年11月19日、飛行機事故で没す。享年34。
 - 7 魯迅がタゴール及び通訳兼随行者の徐志摩を激しく攻撃していることについて、魯迅が正当との立場から論じたものは多いが、秦弓「魯迅与泰戈尔」（『魯迅研究月刊』2002年第5期）は、資料の詳細な再検討と新月派と魯迅の関係などの要素を読み解くことによって、タゴール批判の多くが魯迅の誤解に基づくものであったことを明らかにしている。
 - 8 林長民（1876-1925）：福建閩侯の人。日本留学生。北洋政府司法部総長、福建大学学長などに任ず。1920年、国際連盟協会の中国代表としてロンドン滞在中に、徐志摩と知り合う。星野幸代氏「徐志摩とケンブリッジ—ロジャー・フライとの交流を中心に—」（2004年『言語文化研究叢書 3』）等参照。

9 魯迅「罵殺與捧殺」：1934年11月23日『中華日報・動向』。前出『魯迅全集 第5卷』『花邊文学』所収、615頁。

10 『ノーベル賞名鑑』（1992年改訂二版、名鑑社）、807頁。

参考まで中国語訳を挙げる。「由於他那為敏銳、清新與優美的詩；這詩出之以高超的技巧，並由他自己用英文表達出來，使他那充滿詩意的思想業已成為西方文學的一部分。」「1913年諾貝爾文學獎 拉賓德拉納斯·泰戈爾（印度） 得獎評語。」『諾貝爾文學獎全集 8』1981年、[台北]遠景出版事業公司刊。

11 1924年のタゴール初来華は、あたかも1916年のタゴール初来日の事情を彷彿させる。タゴール来日直前までに、『ギタンジャリ』を始めとするおもな英文作品の翻訳は出そろい、多くの評論が書かれ、雑誌は競って特集記事を組んだ。そして、徐志摩ら新月派を始めとする文学者や仏教界のタゴール信奉者と、対抗する魯迅ら批判的知識人たちの反目状況も、やはり来日時と同様である。1916年6月、タゴールへの熱烈歓迎に対し、岩野泡鳴は「タゴール氏に直言す」と題してこう記していた。

最後に君、僕等のまた別な注意を受けよ一君の周囲には佛教家にせよ、畫家にせよ、その他にせよ、時代後れの舊式家どもばかりがつきまとつていようだ。そして君の訪問しに出る人々は、大隈伯の如き、原某氏の如き、政權家や富豪ではあらうが、碌に思想的修養もなく、現代の深い問題には殆ど全く無關係なものばかりだ。それで日本を知つたと思つて歸ればおほ間違であらう。（1916年6月17日『読売新聞』）

岩野の言葉は、魯迅が「罵り殺すことと担ぎ殺すこと」に書き付けた批判と通底する。中国、日本ともに、西洋の圧力に抗して近代化への脱皮を図ろうとしていた時期であり、イギリス植民地インドという逆境から輩出したアジア初のノーベル賞受賞作家タゴールに対する期待の大きさは当然の反応であった。だが、タゴールは本来詩人であつて社会活動家ではなく、改革思想の披瀝を求めた多くの意気軒昂たる青年たちの渴を癒すことはできなかった。タゴールの来日事情については、丹羽京子「タゴールと日本」（『タゴール著作集 別巻 タゴール研究』〔1993年、第三文明社〕）等参照。

12 鄭振鐸及び文学研究会を中心としたタゴール受容、特に『小説月報』詩上のタゴール紹介の実際については、芦田肇「鄭振鐸とタゴール文学—文学研究会結成前後における文学意識の一面—」（1989年3月、『東洋文化研究所紀要』第百三冊）に詳細な分析がある。

13 1924年タゴール訪中の受け皿となつた講学社は、梁啓超ら研究系と同系列の組織であり、研究系の機関誌たる『晨报副刊』にタゴールに関する記事が多いのは必然の成り行きであつた。タゴール文学の翻訳以外に、訪中消息なども逐一掲載されている。

14 1919年2月7日から1921年10月10日まで、日刊新聞『晨报』の第7版（面）に文芸欄が設けられ、魯迅の教え子でもある孫伏園が編集に当たる（『晨报副刊』）。1921年10月からは、冊子として独立発行されるようになり、『晨报副刊』の名称が与えられている。孫伏園は1924年に編集を離れ、文学研究会の新しい機関誌『語絲』週刊に移る。この『語絲』に魯迅『野草』が掲載されていくことになった。なお前述の如く、1925年10月から『晨报副刊』編集の任に当たつたのは、徐志摩であつた。

15 この号は、『晨报附刊・文学旬刊』と題する。

16 タゴール文学全体を考える時、伝統的宗教や西洋文学の影響も無論忘れることはできない。参考まで、K. クリパラーニ著（森本達雄訳）『タゴールの生涯（上）』（1978年、第三文明社、61頁）より。「ラビンドラナートの詩的發展には、サンスクリット文学と、中世ヴァイシュナヴァ派の詩と、西洋文学の三つの大きな文学の影響が認められるといわれている。」

17 『タゴール著作集 第一巻 詩集I』（1981年、星供社）の森本達雄氏「解題」に、次のようにある。「・・・その多くが歌としてうたわれているベンガル語の原詩を、メロディーやリズムを抜きにして訳出することは、訳者のおぼつかない語学力では遠くおよばぬところで

あり、それこそ色香のぬけた花を呈することになるであろう。タゴール自身、だれよりもそのことを知っていたために、英文詩集では自分の歌を読まれる詩として散文詩に書き改めたのである。」(傍点原文)

18 1919年8月から9月にかけて、『国民公報』“新文芸”欄に連載。署名は神飛。前出『魯迅全集 第8巻』『集外集拾遺補編』所収、114頁。

19 前出『魯迅全集 第4巻』『南腔北調集』所収、469頁。

20 王統照は、詩の翻訳紹介を熱心に行うなど、タゴールに強く傾倒していた。詳細については、戴煥「「新文学」の構想：詩と詩人の存在意味—王統照とタゴール—」(2002年2月、東大比較文学会『比較文學研究』第79号)参照。

21 タゴール(詩)に対して、懐疑的な意見を表明した者もあった。中でも、徐志摩と同じ新月派に属する詩人聞一多が、タゴールの詩を根底から否定していることは注目される。彼は1923年12月3日『時事新報・文学副刊』に、「泰果爾批評」と題して次のように記す。「…那贏得诺贝尔奖的《偈檀伽利》和那同样著名的《采果》，其中也有一部分是诗人理智中的一些概念，还不曾通过情感的觉识。这里头确乎没有诗。」(孫宜学編『詩人的精神：泰戈尔在中国』[2009年、江西高校出版社]、230頁。)

22 魯迅「再来一次」1926年6月10日『莽原』半月刊第11期。前出『魯迅全集 第3巻』『華蓋集続編』所収、316頁。なお、文中の「詩哲」とは、「詩聖」タゴールにかこつけてこう呼ばれた徐志摩を揶揄した言い方。

23 魯迅「集外集序」(1934年)1935年3月5日上海『芒種』半月刊第一期。前出『魯迅全集 第7巻』『集外集』所収、4頁。

24 この徐志摩「北戴河海濱の幻想」が掲載された同じ1924年6月21日『晨報副鑄』には、「泰戈爾在漢口輔德中學校之講演」(王鴻文記)というタゴール来訪の実況報告記事も載っている。(タゴール中国滞在は4月12日～5月30日)。

25 前出『魯迅全集 第1巻』『吶喊』所収、439頁。

26 1923年9月、『小説月報』第14巻第9号「太戈爾號(上)」。

27 タゴール詩の影響について、張娟「泰戈尔散文詩对“五四”新詩体式的影響」(『齊魯學刊』2009年第6期)は、次のように分析する。“…泰戈尔的翻译者和模仿者众多，水平良莠不齐。尤其是，普通的中国读者，往往看不到泰戈尔散文诗的内在韵味和深厚思想，未能捕捉其诗歌的精髓，他们模仿、接受的多是散文式的诗歌外观，作品普遍缺乏诗的韵味和节奏。”また、孫宜学『泰戈尔与中国』(2005年、広西師範大学出版社、120頁)は、やはり徐志摩の言葉に注目しながらも、徐志摩とは全く異なる次のような結論を導き出す。“…实际上当时除了冰心之外，还谈不上有谁泰戈尔这么大的影响。”

最後に、周作人(署名：仲密)「自己的園地 三 國粹與歐化」(『晨報副鑄』1922年2月12日)より引用する。“我們反對模仿古人，同時也就反對模仿西人；所反對的是一切的模仿，並不是有中外古今的區別與成見。模仿杜少陵或泰戈爾，模仿蘇東坡或胡適之，都不是我們所贊成的，但是受他們的影響是可以的，也是有益的，這便是我對於歐化問題的態度”。なお、この文章のすぐ後ろには、「阿Q正伝」最終回「第九章 大團圓」が掲載されている。